

ざいちのち 58

まちやむら，そこに住む人びと（＝ざいち）の，知恵や生き方（＝ち）から学び，実践する活動です。

CSEAS
Institute of Sustainability Science
京都大学
生存基盤科学研究ユニット
東南アジア研究所「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」・
「ベンガル湾縁辺における自然災害との共生を目指した在地のネットワーク型国際共同研究」



守山フィールドステーション

農具3：百姓の道具は生活の基 三角鋤、平鋤、ジョリン (2)

守山 FS 藤井美穂

すでに述べたように（本ニュースレター No.31）開発（かいほつ）集落では農具は捨てられたり、燃やされたりして処分されてきた。だが、同集落のI家には様々な農具が保存されていた。I家のSさん（女性）の父親は在所（開発集落のこと）で鍛冶屋を営んでいた。鋤や鋤の刃先の製作をしたり、使いへらした農具の修繕をしていた。Sさんによると、父親が作った農具は捨てられないのだという。タガネで刃の先の減った部分を落として、新しい鉄を打って継ぎ足してハガネをつけることを在所では「サキカケ」（先掛け さっかけ）という。

長年にわたって体に馴染んだ農具は、体の一部のようにあって手放せない。在所の人々は「サキカケ」を鍛冶屋でしてもらい、丁寧に農具を使っていた。

「米で苦労したさかい、農具は捨てられん」（K氏 [1926年生]）。在所の家々には捨てられない農具が存在する（写真1）。

稲作が終わった後の田の畝作り、溝掘り、田の縁の整理等に、シャベル型の平鋤が使用された。現在も手入れをして使われている物もある。

三角鋤（写真2）は両辺が歯になっていて、便利だった。田の畦の下に水をいれてケラが田に入るのを防ぐのを「ケラギ」という。ケラは稲の根を食べる害虫である。「ケラギ」をするのに三角鋤を使った。

平鋤（写真3）は、畦や畝を作ったり、畦を切ったり、畝を砕いたりするのに使われた。また畦たてなどに用いられた。「鋤でキメをつく」、「土きり」（畝の土を

鋤で細かくする）作業は一毛作田の田ごしらえ（本ニュースレター No.35）で行われてきた。

本ニュースレター No.57でジョリンについて述べたが、ここで述べるのは柄が長く、先は鉄製である（写真4）。真ん中に1本の細い平らな棒がはいっている。その両側に4本ずつの棒、計8本はいてスリットをつくっている。ナタネ、麦（大麦、小麦）の冬作の時に土地入れに用いた。

ジョリンの聞き書きをA氏（1926年生）とK氏にしていた時、麦の土地入れの話になった。二人で話し始めた。在所の田は湿田なので、麦踏みをするに畝が崩れて平らになってしまう。それでジョリンで土入れをするのである。土がよく乾いている場合は、ジョリンを使った。だが、湿った土の場合は、冬に素手で「もみすり」（土をもむ）をして、麦の芽の上に土をかぶせた。この「もみすり」は昭和22年頃まで続いた。「土は霜でちびたい（冷たい）。1日中、二人で1反を『もみすり』をした。それはちびたかったで」（K氏）

合わせた両手に土をはさんでもむのである。その姿は拝んでいるように見える。

「そやな。ちびたかった。百姓は神、仏を拝まんと、土ばかり拝んどった」（A氏）

在所で農具の聞き書きをすることは、祖先から受け継いだ知恵や伝統を記述し、記録に残すことだけではない。上記のような農具から端を発したA氏とK氏の会話の内容は、日頃ほとんど聞くことができない当時の彼らの「思い」や経験についてである。こうした彼らの会話は心に響き深い味わいがある。私が聞き書き調査で大切にしていることである。



写真1：左から三角鋤、平鋤、シャベル

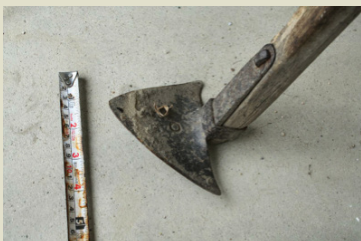


写真2：三角鋤



写真3：平鋤
長さ115cm。幅上辺15cm、下辺14cm、高さ43cm。柄の直径3.5cm。握り手の長さ12cm。



写真4：ジョリン（ジョレン）
柄112cm、鉄製の先の長さ31cm、幅19cm、深さ11cm。

ミシマサイコを収穫する静かな怒田集落での早春の一日

高知大学 市川昌広

一週間前の大雪がうそのように眩しい早春の日差しだ。フクジュソウの黄色も輝いている。高知県大豊町の怒田集落でミシマサイコという薬草を栽培しはじめて3年が経つ。出荷期限の3月上旬に間に合わせるために収穫を急がなければならない。軽自動車に収穫に使う道具一式を積み、集落の細い幹線道を畑に向かう。途中で鋤を担いで歩いているFさんとすれ違い、挨拶を交わす。去年刈り取って積み上げてあるカヤを刻み、それを畑にまいてすきこみに行くという。

幹線道を外れて、自動車一台分の細い道を下っていく。このような細くも家々に通ずる道は舗装されている。しかし、ほどなくして積雪でそれより先には自動車では進めなくなる。集落内の雪は大方とけて雪かきで積み上げた所に残っているだけだが、この一画は成長した杉の木立が高く、道が一日中日陰になっており、まだ20センチほど一面に積もっている（写真1）。

道の先には2軒の家がある。手前の家に独りで暮らしていたAさんは去年の秋に亡くなった。その少し先のBさんご夫妻は、高齢で体がいうことを利かなくなり施設に入るために一昨年そろって集落を出た。去年の冬まではAさんが雪かきをしていたので道にこのように雪は残らなかった。



写真1：日陰になった道に残る積雪

まだ誰も歩いていない積雪帯をふくらはぎの高さまで埋もれながら一歩一歩進んでいく。鋤など収穫用の道具一式を両脇に抱えていることもあり、数日前の雪かきで筋

肉痛の腰が少ししんどくなってくる。集落の幹線道路はまだ体が動く者が雪をかきが、そこから家の玄関先までは各家で雪かきをしなければならない。高齢者にはきつい仕事だ。そのような家の1、2軒の雪かきを手伝った。その内の一軒ではすでに90歳を超えたTさんが右腕をギプスでつっていた。雪の中、家脇に積んである薪を取りにいったときに転んで手首にひびが入ったという。自動車が玄関先につけられる分だけでも雪をかくと喜んでおられた。

積雪帯を抜け、元Aさん宅を過ぎ、ミシマサイコを作っている畑脇につく。道にはスギの枯れ枝が風で集まり、半ば朽ちながら積もっている。たまに掃いて道脇によけていたが、す

ぐにまた積もって苔むしたり、草が生えてくる。畑に降り立つとすでに9時半だが、畑の半分はまだ日が陰っている。ここも東側に高く育つ



写真2：収穫が終わったミシマサイコの畑

た杉の木立が邪魔をして、日差しを遮っている。冬に日があたり始めるのは10時を過ぎてからだ。30、40年前、少しでもお金になればと、集落内の地の利が悪い田畑に植えたスギやヒノキが今や高くなり、日陰を作り、見通しを悪くしている。シカやイノシシなど獣害の隠れ家にもなっている。

畑の周りには雪が残っているが、幸いにも収穫はなんとかできそうだ。鋤をふり、ミシマサイコぎわの土を掘り起こし、せつせと根を収穫する。暖かな日差しの中、鳥の囀りは聞こえるが、人の声や耕運機や草刈り機など仕事の音は聞こえない。谷をはさんだ対岸の集落の家々や田畑は望めるが、人が動いている様子うかがえない。静けさの中、作業を続ける。

ふと、集落の下手の方から演歌のメロディーが風に乗って小さく聞こえてくる。移動スーパーだ。週2回、2トトラックで主に食料品を載せて巡ってくる。商品を売る停留場に近づくとスピーカーから演歌を流す。その合図に誘われて家を出てくるのは、しかし、どの停留場でも1、2人だけだ。40年ほど前なら20人は集まってきて、支払いに長い列ができたという。住民が少なくなり、かつ多くが自動車を持って外へ買い物に出かけるようになり、客足は減り続けている。移動スーパーの店主も70歳を越えており、集落の細い道を行きつ戻りつする仕事はしんどそうだ。2年前まではこの畑の近くまで上ってきたが、居住者がいなくなった今はもう来ない。

再び静けさの中、鋤をふるって根を掘り出す。昼近くになると暑くなり、ヤッケを脱ぎ作業をするが、汗が額をつたう。私が初めて怒田を訪れた5年前と比べても、住民の数は減り、体が利かなくて仕事のままならなくなった人が増えている。集落の静けさは少しずつ増しているようだ。

しかし、こうした中、毎年、何人もの高知大学の学生が入ってきて、さまざまな活動を半ば自主的に行っている。畑を作り、収穫し、それを自ら加工し、販売している。慣れぬ農作業に体がきつい時もあるだろうが、生き生きと活動している。この怒田集落での活動に何かを探し求めているかのようだ。この4月からは、2年前に高知大を卒業した一組の学生が結婚し、怒田に新住民として入ってくる。新たな集落社会が創出されていく芽はわずかずつではあるが育ち始めている。(2014年2月下旬の怒田集落にて)

亀岡市における市民農園の運営形態と利用者実態 滋賀県立大学 環境科学部 柴崎貴大

このたび、滋賀県立大学の卒業研究^[1]として地元である亀岡市の市民農園について調査を行った。この調査の目的は亀岡市における市民農園の実情の把握である。今回の調査では亀岡市にある市民農園の中で、市役所で紹介をしている7つの農園の中から調査協力を得られた4つの農園を対象として調査した。対象の農園には、市民農園運営者、利用者別に調査を行った。利用者には4農園で37人の利用者にアンケートを用いて調査を行った。

1. 亀岡市の利用者実態

利用者に行ったアンケート調査結果は以下のとおりである

1.1 年齢

最も多い年代が60代で17人おられた。また50代以降となると27人おられ7割以上を占める。10代の方も3名おられたが、利用者の子供さんであり、契約者で最も若かった20代で1人であった。

1.2 職業

会社員が最も多く、12人おられた。その次に無職が9人、専業主婦が5人、自営業5人という結果になった。直接ヒアリング調査を実施した際、無職と答えられた方は全員が定年退職された方であった。残りの方も年齢が全員60代以上であることから、おそらく定年退職された方だと考えられる。

1.3 移動

農園までの移動手段で最も多かったものは自動車であった。28人の方が自動車で農園まで来られ、残りは電車が5人、自転車4人、バイク、徒歩が2人であった。なお、電車で移動される方の中5人中3人は自動車も利用しておられた。移動手段別に所要時間を見ると自動車が全体的に多く使われているが、特に60分以上になると自動車しか使われていない結果が出た。調査を行った4つ農園のうち電車で来ることができる農園は2つだけであるため、自動車の移動が多くなったものと考えられる。結果から多くの方が徒歩や自転車でも移動できるほどの距離に住んでいないことが推測される。

1.4 利用頻度

利用頻度は週に1度以上利用する人が21人おられ、13人は週に2度以上利用されていた。逆に利用頻度が月に1度未満の方は10人おられた。

1.5 滞在時間

平日の滞在時間が0分の方が14人おられ、休日に比べ滞在時間が短かった。これは平日には利用せず、休日に利用される方が多いためだと考えられる。また利用される人の平均滞在時間も平日は約100分であるが、休日は約150分と50分長かった。平日は30分、60分が最も多く、休日は120分と180分が最も多く、休日120分、180分、120分～180分滞在する人の多くは平日に農園には行かない。

1.6 農作業の経験

農園利用者が現在の農園を利用する前に農作業の経験が

あったかアンケート調査を行ったところ、23人の人が農作業の経験がないと答え、14人は農作業の経験があった。農作業の経験で最も多かったものが他の市民農園の利用であった。

1.7 現在の農園の利用年数

1年目と答えた方が14人と最も多く、5年以上続けられている方は11人おられた。調査を行った4つの農園のうち2つが4年目であったため5年以上続けられておられる方は少なくなるはずであったが、1つの農園で利用者の継続率が高く、5年以上利用されている方が9人おられた。

2. 利用頻度に関わる要因

「職業」「農作業の経験」が利用頻度と関係があることがわかった。

・職業

職業別に利用頻度を比較した結果、会社員がそのほかの項目よりも農園を利用する頻度が少ないことがわかった。職業のそのほかの項目は、自営業、専業主婦、アルバイト、無職、その他、であった。会社員がそのほかの項目より農園利用頻度が低かった理由は、会社員以外の職業の方が自由度が高く、農園利用の時間を作りやすいからだと思われる。会社員の方は最も頻度が多い人が「週に数回」であり、答えた人は1人であった。また残りの方は「週に1回」「2週間に1回」「年に3～4回」と答えられた。会社員と答えられた方は、休日に農園利用をするため、週に1回以下になることが多いと考えられる。また亀岡市は定年後の利用が37人中9人と多く、利用頻度が多いユーザーであると言える。

・農作業の経験の有無

農作業の経験がある人の中で、他の貸し農園で経験があったといった人の利用頻度が他に比べると比較的多かった。最も少ない方で「2週に1回」であり、そのほかは「毎日」と答えられた方が1人、「週に数回」と答えられた方が4人、「週に1回」と答えられた方が2人であった。他の貸し農園を利用し、再度現在の農園を使っているということは、おそらく農業に興味があり、かつ再度農園を借りるだけの時間の余裕があると考えられ、そのような人が農園を利用しているため、利用頻度が比較的多いものと考えられる。

3. 展望

利用者は契約後のミスマッチがないように契約する農園について調べる必要がある。貸し農園に何を求めているのか、何があればうれしいのか、予算はいくらか、どれくらいの規模でしたいのかなどを自分でしっかり把握しておくことが大事である。また農園内の利用者間の交流や利用者の利用頻度なども調べておくことが必要になってくると考えられる。

逆に農園運営側は利用者のためにも農園の情報を開示することが求められる。上記のような項目だけでも、多くに公開すべきであると考えられる。

[1] 柴崎貴大「亀岡市における市民農園の運営形態と利用者実態」2014年2月10日

はだしの文化

おおり医院勤務 東南アジア研究所特任研究員
分部 敏

今年の正月にミャンマーのヤンゴン国際空港から深夜便で日本に帰ろうとした時でした。待合いの椅子に座って、閉まりかけた向いの土産物売りを眺めていました。売り子の若い娘さんが出て来ました。待合い椅子の脇にあったゴミ箱のところまで来て、ちり取りの中身を捨てました。娘さんは裸足でした。ミャンマーの日常では特に珍しいことではなく、その光景を眺めていました。その後、トイレに行くと若い掃除夫が掃除をしていました。素足で、箒で床を掃いていました。これから水で床を洗うところだそうです。

ミャンマーの寺院をいくつか見て来ました。寺の敷地

の入口から裸足になりました。ヤンゴンのシュエダゴン・パヤ（シュエダゴン寺院）は敷地が広くて、裸足では朝は冷たく、日中は陽に焼けて熱い思いをしました。寺社で靴を脱ぐのは、ミャンマーに限ったことではありません。寺社では裸足でいることが第一にあり、靴を脱ぐ行為はそこから出てくる副次的なことだと思います。着飾って寺院に行くわけでもありません。ミャンマーでは裸足（はだし）の文化が根強く残っていると思いました。

東南アジアやインドの人々は、もともとは素足の生活をしてきたと思います。バングラデシュの農村で見たある家では、家の中がすべて土間になっていました。家の土間を、庭先まで、たびたび箒で掃いていました。家に入る前に靴を脱ぐかどうかではなくて、家の床はたとえ土間であっても、外とは区別する感覚があると思いました。床の上に直接に食器を置いて食事をすることもあります。

それに対して、家の入口で靴を脱がない文化の民族は、家の床は外と地続きと考えるのでしょうか。先日、日本のテレビで放送していた南イタリアのシチリア地方の民家では、ゴミは床に一旦落とす習慣だということでした。

以前にバングラデシュのコミュラにある BARD（Bangladesh Academy for Rural Development）のディレクターの執務室に招かれたことがありました。部屋は靴を脱いで入るようになっていました。個室では靴を脱ぐことが度々ありました。

1964年の東京オリンピックのマラソンではエチオピアのアベベが優勝しました。アベベは、前回のローマ大会で裸足のランナーとして有名になった選手です。大会前に靴が壊れ、自分に合う靴が無く、裸足の方が走りやすかったからのようです。子供のころから裸足で走ること慣れていたようです。

日本では外反母趾で悩んでいる人をみかけます。靴履きの生活によってもたらされたものかも知れません。足先の狭い靴の影響というより、靴による足の包み具合や高い踵（ヒール）によって歩き方が変わることにより、足全体の筋肉や骨格のバランスが変化して、母趾の関節の変形が目立つようになるのかと思います。

日本でも素足の生活は心地よいと思います。最近は見直されてきて、居酒屋でも入口で靴を脱ぐ店もあります。



写真1：境内の中心にあるパゴダ（仏塔）（シュエダゴン・パヤ）



写真2：境内は素足、好きな場所で祈りの境地に入る（シュエダゴン・パヤ）